

# 山口県立大学 郷土文学資料センターだより

## 嘉村礒多談話「村長は損長」

加藤 禎 行 (郷土文学資料センター・研究員)

折に触れて嘉村礒多テキストの初出雑誌を閲覧し、同時代の文脈の中で嘉村礒多の位置付けを再考することがあるが、先般、嘉村礒多の小説「母」の初出雑誌『家庭』第二巻第九号(1932〈昭和7〉年9月、大日本聯合婦人会)を閲覧していて見慣れないテキストに出会った。目次には嘉村礒多「村長は損長」とあり談話筆記であったが、『嘉村礒多全集』全2巻(1964〈昭和39〉年11月～1965〈昭和40〉年9月、南雲堂桜楓社)を確認すると採録されていない。後日追って確かめてみれば、全集編纂後に刊行された昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第36巻(1972〈昭和47〉年12月、昭和女子大学近代文化研究所)掲載の嘉村礒多に関する「著作年表」には「村長は損長」のタイトルが採られており、手仕事の見録作成が到達していた水準に喰らされた。

雑誌『家庭』は、1931〈昭和6〉年6月に創刊された大日本聯合婦人会発行の婦人雑誌(終刊は1941〈昭和16〉年8月)。必ずしも文芸欄が充実していた雑誌ではなかったが、創刊二年目の1932〈昭和7〉年には、徐々に文壇人からの寄稿も増え始めている。『家庭』第二巻第九号での嘉村礒多の小説「母」は、「特輯『秋と郷里』の短篇小説」欄で、関口次郎「秋と曲馬団少女の死」、阿部知二「路傍の人」、十一谷義三郎「秋の挿話」とともに掲載された。

同号の「インタビュー・ヴァリエテイ」欄の嘉村礒多の談話筆記「村長は損長」は、全22名の諸名家とともに掲載されており、同号巻末の中川敏夫「編輯を終つて」には、「□「インタビュー・ヴァリエテイ」は、本誌編集部の人々の訪問記事への総進出である。小手ならしの第一歩として現はれた記事がこれである。記者達の才筆敏腕が名士と切り結んだ対面僅かに五分の会話の火花が生んだ反映である。」とある。小説「母」の原稿依頼や受け取りの折の筆録であったか。掲載されている嘉村礒多の肖像写真は、あまり見かけない表情でこちらも興味深い。嘉村礒多の談話筆記「村長は損長」の全文は以下の通り。

農村の萎靡荒廃は全国的に普遍した事実ですが、それでも地方により相当程度の差があると思ふんです。その萎靡した、原因は多様で、ここに述べるのは勿論一原因に過ぎないでせうが、こういふことはたしかにいへると思ふんです。私の郷里山口県のある村々で頻々と倒れた財産家についていふと、彼等は村の村長、村会議員等々の名誉職或は親分的な地位に、むやみにあせつてなりたがつたんです。そのため子分や一般の人心をつなぐために没頭して、出入のものに財産を騙られる、従つて彼等は職を悪用して村の財政の秩序を乱してしまふといふ結果になつてしまつた。

かうしたやうに物質的不足でなくて精神的不足から村の萎靡を来した場合も全国に少なくないと思ふんです。

そういった立場から物をいふならば、精神的の根底がしつかりしてゐて、各自身分に依じて小さいものは小さいなりに小さく生活してゆけば、いくら農村でももう少し多く物的生活の動揺なしに生活して行ける人があつた筈だとも思ふんです。



雑誌『家庭』第二巻第九号  
(1932〈昭和7〉年9月表紙書影)

ここでは「郷里山口県のある村々」と語られ、必ずしも山口県吉敷郡仁保村のことを名指しているわけではない。しかしながら嘉村礒多の父親若松は、太田静一『嘉村礒多 その生涯と文学』（1971〈昭和46〉年4月、弥生書房）が、「明治三十八年、若松は部落の人に推されて村議員になった由であり、次いで四十三年にも再選されている。しかし部落の山林のことで厄介な紛争が生ずるや彼は即座に辞職してしまったとのことである。」と伝えるように、村議員も務めた仁保村の地主であった。また礒多自身も、多田みちよ『嘉村礒多―「業苦」まで』（1997〈平成9〉年7月、皆美社）が和田健のメモを引用するかたちで「大正六年十月仁保村役場の雇を拝命。十一月一日書記に昇進」「大正八年六月十四日依願退職／十月 復職 月俸十二円／十二月二十七日 退職」と記述しているように仁保村の村役場の中にいた時期もあり、地方農村の名士たちの風聞や動静については、一定の見識を持っていたとしてもおかしくはない。

ところで談話タイトルの「村長は損長」という文言は談話筆記記事のなかには見受けられない。「特輯『秋と郷里』の短篇小説」欄に関連して、何か郷里の話題をと尋ねられ礒多が応じたものに、記者の側でタイトルを附したものと考えておきたい。

## 暮らしのなかの歌—中野雅恵さんにお話をうかがって

池田 誠（中原中也記念館・学芸担当課長補佐）

本誌前号（第43号）では、昭和戦前期に山口市で発行していた歌誌『水可美』の主要同人であった中野三郎、中野稲子の短歌について、二人の短歌を合わせて読むことで見えてくることを中心に紹介した。今回は、三郎・稲子の次女である中野雅恵さんに取材した内容をもとに、三郎と稲子にとっての歌について、より深く探ってみたい。



中野三郎 中野雅恵氏提供

中野三郎は1900（明治33）年1月20日生まれ。父・友一、母・ステがともに早世し、叔父の<sup>とらきち</sup>厩吉のもとで暮らすこととなる。厩吉は、大阪と神戸で西洋洗濯（クリーニング）の技術を学び、1900年に山口町中河原において西洋洗濯店を開業していた。三郎も、叔父にならい、神戸で西洋洗濯の修業をし、技術を身につけた。

中野稲子（戸籍名はイネ）は1906年5月20日、父・厩吉、母・ルイのもとに生まれる。厩吉には他に男子がいたが、西洋洗濯の技術力が高い三郎を見込んでか、厩吉は稲子の婿とし、店を継がせる。稲子は従兄にあたる三郎の妻となった。

二人は2男2女を授かり（長女は早逝）、仕事と子育てに生きた。三郎は人望が厚く、戦時中は警防団の団長として、戦後はクリーニング業界団体の役員として、日々奔走した。稲子は病弱の身ながら、力仕事が多いクリーニングの仕事を男性に交じって勤しんだ。

三郎は、若いころからカルタ（百人一首）を趣味とし、同好会に入っていたが、その記憶力の高さを年上の歌人・小川五郎に買われ、短歌の創作を勧められる。いくつかの歌誌に参加した後、1933（昭和8）年『水可美』の創刊同人となる。雅恵さんによると、短歌の創作を始めるきっかけが百人一首だったことが、和歌の伝統を意識した歌の傾向につながっているという。

一方、稲子は、夫・三郎の影響から作歌を始めたと考えられる。稲子は、三郎と違い、いきなり同時代の短歌に触れた。そのことが、稲子の歌の素直さ、率直な歌いぶりにつながっていると雅恵さんは推測する。

三郎には、叙景歌に加え、くうらうらと雲雀があがる郊外にあきなふことのこよなく楽し（『水可美』第4巻第4号、1936年4月）など、仕事の最中を詠う歌も多い。稲子は、くいらいらしく言かくる夫にまむかひていふべきすべもさしひかへたる〈此の日ごろ夜更くるまでも仕事する夫の健康をいたくあんじつ〉（第3巻第1号、1935年1月）と、夫の言動に心を乱されながらも、その身体を案じる歌が見られる。



中野稲子 中野雅恵氏提供





『水可美』同人による秋吉台長者ヶ原吟行  
 前列左から4人目が三郎、その後ろ、2列目左から3人目が稲子  
 『水可美』第1巻第5号（昭和8年6月）36頁に同じ写真が掲載されている。  
 中野雅恵氏提供

二人は仕事と家事で多忙のなか、歌を作り続けた。前号で紹介した通り、『水可美』同人のなかで、三郎と稲子が最も多く夫婦で吟行に参加し、同じ出来事を歌題とすることが多い。三郎は多作で、作歌数は『水可美』の中でも上位に位置する。1935年頃は『水可美』の編集にも携わった。自宅で「三日会」なる歌会を催していたことも、『水可美』の記事からうかがえる。稲子は、中村憲吉に師事し、1933年頃は『アララギ』でも活躍した。

稲子は1936年3月発行の第4巻第3号を最後に、作品の発表が途絶えた。第4巻第9号の「消息」欄に、雅恵さん誕生の報があるが、出産を契機に歌作から離れたのかもしれない。雅恵さんは、稲子が歌を作るのを見たことが無く、歌作を話題にするのを聞いたこともなかった。だから、『水可美』に稲子の歌が数多く掲載されているのに驚いた、という。

三郎は、『水可美』終刊後も変わらず、1989（平成元年）年に90歳で亡くなるまで、歌を作り続けた。雅恵さんは、外出がままならなくなった晩年の父の歌稿を、近所に住む『水可美』以来の友人・友広保一のもとに持っていき、添削を受けた。そして、やはり外出がままならない友広の代わりに持ち帰り、父に渡していた。

三郎と稲子は、家業のクリーニング業を何よりも一番に考えて暮らした人であったと、雅恵さんは二人の生涯を振り返る。しかし、その非常に多忙な生活の中で、二人が歌とともに生きたひとときがあった。三郎と稲子の短歌には、日々の暮らしと歌の言葉が交差する一つの姿がある。

〈子規先生のみ歌の放送ある朝は夫もとく起き待ちわびにける〉中野稲子（第2巻第2号、1934年2月）  
 〈十年を歌よみ次げど吾が歌のいまだ幼しなげこふべしや〉中野三郎（同）

## 寄贈図書（2024年6月～2024年11月）

河村正浩『句集 うたかたの夢』、河村正浩『句集 枯野の眼』、岡昌子『田上菊舎 年譜集成』、菊舎顕彰会『菊舎のおはなし 菊舎さんってだーれ?』、菊舎顕彰会『田上菊舎 和歌集』、下関市立美術館編『菊舎 旅と友を愛したひと』、熊本玲子『雑文集 山の匂い』

## 寄贈雑誌（2024年6月～2024年11月）

『文芸山口』第375～378号（山口県文芸懇話会）、『大内文化探訪』第42号（大内文化探訪会）、『山彦』第182～184号（山彦発行所）、『其桃』第935～937号（「其桃」発行所）、『小宇宙』第12号（コスモス短歌会山口県支部）、『佐波の里』第52号（防府史談会）、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第18号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『研究所年報』第16号（大妻女子大学草稿・テキスト研究所）、『颯』第124号（颯文学会）、『やまなみ』第41号（やまなみの会）、『大地通信』第52号（明日を紡ぐ大地の会）、『山口県立美術館ニュース 天花』第142号（山口県立美術館）、『新紫南』第2～4号（田村悌夫）



龍福寺の紅葉のトンネル

## 編集後記

今号では、加藤禎行（郷土文学資料センター・研究員）・池田誠（中原中也記念館・学芸担当課長補佐）両氏にご寄稿いただきました。

滞在研修で半年間を京都で過ごし、オーバーツーリズムの苛烈さを肌身で感じました。そのうえで山口にもどると、観光地といっても、適切な（あるいは、やや少なめの）観光客のおかげで、とても心穏やかに過ごすことができました。なにごともしなければいいというものではない、と実感します。

（菱岡憲司）



嘉村磯多談話「村長は損長」  
本文・嘉村肖像写真



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜畠6-2-1）  
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251  
■発行日：2025（令和7）年1月20日